

国語国文学会だより



No. 50

2014. 5

日本文学科卒業生の会

国語国文学会

平成二十五年秋大会 報告

平成二十五年秋大会を十一月三十日（土）、百年館にて開催しました。

◆午前の部（研究発表）

・「朝野群載」所収「御剣銘」考

古事記におけるヤマトタケルの熊曾征討譚 岩田 芳子氏

・菟原処女歌考 本学博士課程前期一年 福留有樹氏

・伊勢の和歌表現 本学博士課程後期一年 安井 絢子氏

・「伊勢集」五三・五四番歌を通して

雲居の雁の人格の変遷——養育環境から—— 本学博士課程後期一年 谷崎たまき氏

・「今とりかへばや」の「母」 本学博士課程前期一年 三石 純子氏

・「夜の寝覚」との比較から—— 本学博士課程後期二年 伊達 舞氏

・歴史小説から見る鷗外の女性観 「安井夫人」「魚玄機」を中心に 本学博士課程前期一年 岡村あずさ氏

・宮沢賢治「グスコップドリの伝記」研究 本学博士課程前期一年 銭 靖氏

・五島美代子第一歌集「暖流」 〈母の歌〉をめぐる—— 本学博士課程後期一年 濱田美枝子氏

・三浦綾子「塩狩峠」 中村春雨「無花果」受容をめぐる—— 本学博士課程前期一年 上岡 沙都氏

・小川洋子「薬指の標本」

——「わたし」の身体感覚にみる欲望——

・会話における質問形式に現れる聞き手の言語行動 本学博士課程前期一年 大町光代氏

・日本語学習者の話し言葉における指示詞使用について 本学博士課程前期一年 北島礼子氏

・◆午後の部 本学博士課程前期一年 柳 敬姫氏

総会

公開講演会

・石川淳「処女懐胎」を読む——奇跡の政治性 本学教授 山口俊雄氏

・本を見つめる／伝える 雑誌「ダ・ヴィンチ」編集長 関口靖彦氏

◆懇親会 於 七十年館生協食堂

秋大会公開講演会

関口靖彦氏「本を見つめる／伝える」

「『講演と質疑応答の概要』「ダ・ヴィンチ」の編集長、関口靖彦氏から「本を見つめる／伝える」というご演題でお話をいただきました。構成としては、大きく二つに分かれており、それぞれの章で質疑応答を設けていただいたので、より多くの学生聴衆からの疑問にお答えいただきました。ご講演と質疑応答の概要をご紹介します。

●編集の仕事とは

前半では、編集の仕事がどのようなものか、実際の「ダ・ヴィンチ」の紙面作りのプロセスに沿いながらお話をいただきました。

「ダ・ヴィンチ」は来年創刊二十周年を迎える「本とコミックの情報誌」で、どの本を読んでいるのか、わからない読者に、本に面白い本を見つけて薦めること、そして本の世界を盛り上げることが理念で

す。関口氏がこの仕事で大事にしていることは、「この面白いよ！」と多くの人に伝えたいという気持ち、その子どものころから変わらない単純な気持ちとのことです。

編集者は、企画から発売後の宣伝までを担当しています。関口氏は大きく三つに分けて、編集の仕事のポイントを教えて下さいました。

まずは企画の立案です。企画を立てる際には今みんなが知りたいこと、触れたい雰囲気や常々考えています。既に人気があつて皆知っているものには反響が少なくなる傾向があり、今まさに人気になるうとしていたり、これからメジャーになるものを見極めて企画を立てています。出版以外の仕事の人の付き合いの中でアイデアが生まれることもあるそうで、なるべくいろいろな人との出会いや交流する場を大切にしています。

次に、企画を実現するために必要となる才能を集めます。例えば作家の特集をする時ならば、誰と対談すればその作家の魅力が伝わるのか、などといったことを考えます。カメラマンやイラストレーターなども、その企画に合わせて声をかけていきます。この時に重要なのが、より多くの才能のストックを持つことで、その為に、休日でも個展などに行つて、気になったら声をかけて人脈を作るよう心がけているとのこと。

最後は、出来上がった本や雑誌を読者に届ける、という仕事です。書店への営業や、広告はもちろんのこと、発売イベントなどの立案も編集者の仕事です。とにかく多くの人に本や雑誌の存在を知ってもらうことが大切です。

『ダ・ヴィンチ』の紙面を作る際には、特集では多くの人が手に取るように敷居を低くし、特集以外の部分でディープな本に気付ききっかけになつても

らせる構成が意識されています。関口は広く、奥は深く、本の世界に読者を引っ張り込む工夫をしているとのことでした。

●質疑応答①

Q1 自分が面白いと思つた本を友人に薦める際に、相手があまり良い反応をしつてくれないことがあるのですが、感覚の違いをどう補正しているのですか。

A1 雑誌を作る際にも、その点はかなり気を配っています。まずは「色んな人と話してみる」ことが必要だと思います。色んな人に「この作家(本)知ってる？」などと聞いてみて、そのレスポンスがどのように返ってくるかを見ています。中には、他のライターさんのアンテナを借り、情報を教えてもらうこともあります。誰にでも薦められる本はなかなかないですが、それを探すことも大切ですし、友人との間だったら、その相手の大体の好みが分かるところなので、その人に合った本を薦めてあげることもできると思います。

Q2 企画してから出版まで時間があると思うのですが、どのくらい先を見て立案をしているのですか。

A2 特集決めは二カ月に一度あるのですが、三、四カ月先のものを決めていきます。これは仕事をしている中で自然にできたスパンです。速報性はもちろんネットに負けてしましますが、紙媒体では、特集を深く掘り下げられます。広く浅くの情報は今ネットで手に入るのので、付加価値をつけられるように、時間をかけて深いものを作っています。

Q3 表紙のこの人を載せるタイミングを見極めるコツとは。

A3 身も蓋もないのですがなんとなくです。これも周りの人と話している中で、名前が出てくる

ことが増えてきたり、名前は知らなくてもあのCMに出ていた人、と言って分かるようになってきたり、他の雑誌で見かけるようになったタイミングです。でも全員は知らないというポイントで声をかけます。時期によってはそのような人がいなくて、既に人気のある人に声をかけたり、男の人が続いたり、その逆だったり、ということもあります。

●本を見つめる／伝える

後半は雑誌の編集から離れ、私達でもできるような本を見つめる、伝えることについてのお話でした。関口氏の実験なども踏まえてアドバイスして下さいました。

本を「見つめる」際には四つほどポイントを挙げて下さいました。一つは、自分の感覚に合った本屋を見つめることです。新刊であっても売り場担当の書店員のセンスで決まっています。目利きのプロである書店員さんの力を借りることも大事です。今は店主の癖が出るような小さいお店が減つてしまいましたが、自分の好きなお店を見つけると良い本との出会いも増えると思います。

次はジャケ買い、という方法です。編集者が一番工夫するのは、表紙と帯です。魅力的に感じてもらえるような工夫をしているので、その表紙にビビッと来たら、それは自分の好みの本かもしれない。三つ目は、本好きの友人です。最近SNSなどで感想の共有が簡単になりました。本をお互いに薦め合える場所への積極的な参加も、よい本と出会うためのポイントです。

最後は、自分の「面白い」を広げることです。自分のこれまでの好みに捉われず、未知のものへと関心を広げてみることも大切です。昔読んであまり面白く思えなかったものでも、時間を空けて出合い

直してみると面白い、ということもあります。

それから、本を「伝える」ことについて。これは、本好きの皆さんにぜひやってほしいことです。その際のポイントは三つあります。一つ目は文章にしてみる事です。自分がどこが面白かったのか、書いていくうちに気付くこともあります。それが自分にとってどんな意味があったのか考えるヒントにもなります。

二つ目のポイントは、文章化する際に感想ではなく書評を書いてみる事です。感想は「面白かった」と書きますが、書評は客観的な視点を持ちます。書評を書くことで、その本への理解が深まるのです。特に時代との繋がりを意識して書くのは有効です。その時の恋愛観、仕事観などを絡めてみると、本がその時代にどのような位置づけだったのか後からでも分かります。

最後のポイント、これが最も重要で、「共感」と「ワンダー」です。今は特に自分の分かる範囲のものを面白がる傾向があります。でも、「なんだこれ」という知らない感覚、「ワンダー」と出会うことも読書の本当の面白さではないと思います。「ワンダー」を含めて物語を作ることが、作家のすごさでもあります。その自分の「ワンダー」を上手く伝えられると、より多くの人に興味を持ってもらえる効果的なレビューになると思います。

●質疑応答②

Q1 個人の本屋が少なくなっている中でオススメの本屋がもしあれば教えてください。

A1 よく行くのは青山ブックセンターで、店員さんの顔が見えるところが魅力です。山下書店という二十四時間経営の本屋も面白く、小さいのですが選り抜かれています。中野ブロードウェイのまんだらけは見ているだけで楽しいお店です。一つ

のジャンルだけ集めた書店や棚も新しい出会いがあり楽しいです。

Q2 日本では読書は個人のものという感覚が根強かったように思いますが、その点についてはどのように感じていますか。

A2 人に伝える場がなかったように思います。内面でも人もいれば、それを外に出したい人もいたので。最近では読書会やビブリオバトルといった場が増えてきているように思います。本は手元の情報をストックしているもので、それを誰かに手渡すことも含め読書なのではないかと思っています。そのように考えて連載や紙面づくりをしています。

※「研究ノート」第四二号（二〇一四、日本女子大学国語国文学会）の特集記事より一部を転載いたしました。

石川淳「処女懐胎」を読む

奇跡の政治性 山口 俊雄

【要旨】

近日活字になる予定の拙論「石川淳「処女懐胎」論——奇跡とその引き受け、「民主化」とその引き受け」（『日本女子大学紀要 文学部』第六三号、二〇一四・三）について、特に、その構想過程をお示しすることで、石川淳作品を読み深める面白さと文学作品についてあれこれ考察する面白さの一端をお伝えしたい。

石川淳は一八九九年に東京浅草で生れ、東京外国語学校仏語科を卒業後、家庭の事情その他で職を転々とし、ジッド「背徳者」の翻訳なども経て、一九三七年「普賢」で芥川賞受賞、一九三八年一月「文学界」に発表の「マルスの歌」が発禁、編集担当の河上徹太郎とともに罰金刑、一九四六年「黄

金伝説」「焼跡のイエス」ほかで改めて高い評価を受ける。単行本「黄金伝説」（中央公論社、一月）が占領軍の検閲により表題作差し替えという憂き目に遭う。

今回取り上げる「処女懐胎」という作品は、「人間」（鎌倉文庫）の一九四七年九月号—十二月号に連載され、「処女懐胎」（角川書店、一九四八年二月）が初取刊本となる。

あらずじは次の通りである。

大江徳雄（復員、大学生）が、浪越貞子の父・利平に、貞子（去年女学校を卒業）と結婚したいと言うが、結婚を束縛と考える貞子は求婚を受け入れがたいと感じる。だが、貞子のピアノの教師・都賀伝吉と競い合うかのように徳雄は貞子に強引に接吻し、ショックを受けた貞子は悪い夢を見、男性からの性的アプローチにいよいよ嫌悪感を募らせる。伝吉の求婚を「暴行」だとはわづけた際に、伝吉に「告知」だと言われた貞子は、Eのという聖餅箱の文字に感応、精霊によって身こもることになる。

改めて求婚して来た徳雄から貞子は逃げ去るが、まもなく妊娠の自覚を持ち、姉・福子に打ち明ける。貞子の妊娠を知らされた徳雄は、ショックを受けつつも貞子を愛しているという自分の心のありように気付く。電車の中で偶然見かけた貞子を追いかけ、徳雄は遂に貞子の胎内のことも、Eのという文字が光るのを目撃、貞子の懐胎をそれと認める。

追いかける徳雄に貞子は「わが羔羊をやしなへ」と投げかけ、走り去っていった。さらに追おうとした徳雄の前に轟音とともに材木が倒れ、遮った。これらのことが、一九四七年一月二日から同年「五月はじめ」に至る時期に起こったという設定である。では、これまで、この作品はどのように論じられてきたか。

「作者の自在な精神が宰領してゐる」ところの「観念の相剋」佐々木基一「処女懐胎」その他「石川淳作家論」創樹社、一九七二、《要するに、人物たちの生死をつらぬいて運動しつつ、作者がここで提出する主題は、愛にまで昇華された恋愛の運命であり、さらにいえば精神にとつての愛の今日における意味である。それならば、氏の結語はなにであらうか。『略』すなわち、愛は精神の努力によって自証されるものとしてこの努力のなかにみずから解消し、一方恋愛は精神の受難として肉体に課されるということ》（井澤義雄「石川淳（十一）——六「処女懐胎」」『石川淳』弥生書房、一九六二）、《たしかに、ここで作者が提示している現代のマリア劇は、その宗教性（！）によってではなく、その観念性によって、われわれにはなじみがうすい。貞子の胎内に宿ったIHSの観念は、この国の精神風土がかつて所有したことのないどこかの天にその遠い放射根源を持っている。『略』それはないと考えるよりも、あると仮定しておいた方が人間をゆたかにする或る非在の聖域である。そこへ向つて貞子が歩み去つて行つた架空の天界は、われわれがそれを仮想することによつてのみ、暗黒の深淵に浮遊する人間存在を照らし出すことのできるただ一つの光源なのだ。そのみなもとをめざしての魂の遡及行をみごとに描きあげた「処女懐胎」は、戦後文学のなかで他から孤絶してはいるがもともと美しい小説として記憶されるべきであろう》（見立て創世記の世界「石川淳論」筑摩書房、一九六九）といったように、非常に観念的な作品として読まれてきた。

しかし、この作品は本当にそのように読まれなければならないのだろうか。《戦後風俗的側面》、泰西名画展（東京都美術館）や第一回参議院議員選挙など同時代の現実の出来事が作品に取り込まれていることに着目し、『処女懐胎』の背後によこたわるもっとも重要な戦後状況とは、昭和21年11月3日公布、翌22年5月3日施行の日本国憲法であつたはずだし、あわせてその第24条に基づいて同年12月22日に大幅に改正される運びとなる民法（親族編、相続編の根本改正、《家》制度の廃止等がその大綱であることはよく知られている）であつた、と考えられるのである。《とする塩崎文雄（『石川淳「処女懐胎」覚書」「和光大学人文学紀要」一七、一九八三・三）の方向性を踏まえつつ、時代状況と不可分な作品のありようについて明らかにすべく、拙論では次のような展開で議論を提示した。

第一章 求婚・結婚・離婚——敗戦と婚姻制度の転換の中で」で塩崎の水準の読みを確認した上で、「第二章 徳雄の引き受け、超越者への気付き」を指摘し、「第三章 IHSとは何か」でIHSが端的に新しく制定された日本国憲法を寓意していることを言い、「第四章 《言わされる》こと、《行なわされる》こと」「第五章 隠されたプログラム——GHQ/SCAPを通じて、超越者＝占領軍の支配が作品構図に組み込まれていることを述べた。そのような新しい読みを踏まえて、最後に「第六章 一人称語りから三人称語りへ——石川淳作品史の中で」で作品史的位置付けを示した。

議論のポイントとして、（1）あくがれ論が単に大衆動向についての蘊蓄的たとえになつていただけでなく、憲法論と緊密につながっていることへの気付き【状況証拠からもっと明白な証拠へ】、（2）我知らずといったふるまいの多さ【超越者の存在を暗示】、（3）焼ける／焼けない↓空襲との関係↓米軍・戦勝国の存在の浮上【支配論理的かつ物理的超越者・至高者の存在を含む】の三点にまとめられよう。

会計係より

◇会費年額一〇〇〇円納入よろしくお願いいたします。
（会費納入先）日本女子大学国語国文学会
ゆうちょ銀行振替口座番号00130069707

◇国語国文学会会員住所変更連絡先・新規登録先
〒一七四—〇〇四六 板橋区蓮根二—三十一—十四
一—一〇五 永井幸子 ▼日本女子大学国文学科・
日本文学科の卒業生で、まだ会員に登録していない方をご存じでしたら、ぜひお誘いください。

研究室より

◇「国文目白」第五十三号「熊坂敦子名誉教授田中功名誉教授追悼号」が刊行されました。ご希望の方は葉書でお申し込みください。【送料別、八百円（冊子到着後払込）】▼（申込先）〒一一一—八六八一 文京区目白台二—八—一 日本女子大学文学部日本文学科研究室「国文目白」係

◇秋季大会（午前の部）研究発表会 発表者募集

・日 時 平成二十六年十一月二十九日（土）

・応募資格 本学国語国文学会の会員であること
・研究分野 日本文学・日本語学・漢文学・国語科教育・日本語教育

・応募方法 論題と四〇〇字以内の発表要旨を添えて文章で申し込むこと

・応募先 日本文学科研究室内「国語国文学会秋季大会研究発表者募集」宛

・締 切 平成二十六年九月三十日（火）

・選出方法 国語国文学会にて選考を行い、選考結果は後日、個別に通知致します。

二〇一四年五月一日発行

日本女子大学日本文学科国語国文学会卒業生の会
〒一一一—八六八一 東京都文京区目白台二—八—一
日本女子大学 日本文学科内